

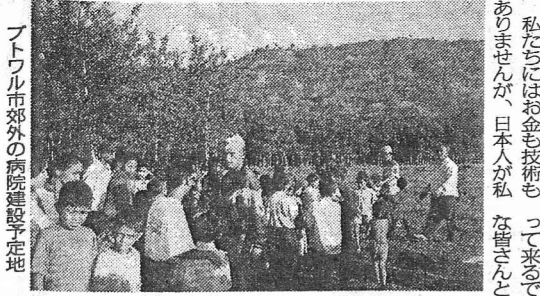
・プトワル市郊外に計画中の子ども病院。その予定地の測量が今週から始まることになり、スルヤ・プラサド・プラダン市長が本紙に感謝のメッセージを寄せ、病院建設に伴う都市整備の夢も語った。

ネパール「子ども病院」建設

昨年の阪神大震災では、ネパールの医師も救援に駆けつけてくれました。病院建設は、そのお返しの意味も込められています。プラダン市長、ネパール



でも地震があります。阪神大震災のことは詳しくは知らないが、多くの日本人が苦しんだと聞いています。開発が進んだ日本にも、富める人も貧しい人もいます。私たちのために動いてくれたり被災者が私たちに病院づくりという形で示してくれたら、私たちが「何か」を持ち始めました。これからできる病院のために、市としてもできる限りの協力をしたいと思っています。今後、多くの日本人がこの市にやってくるでしょうが、そんな皆さんと手を取り合



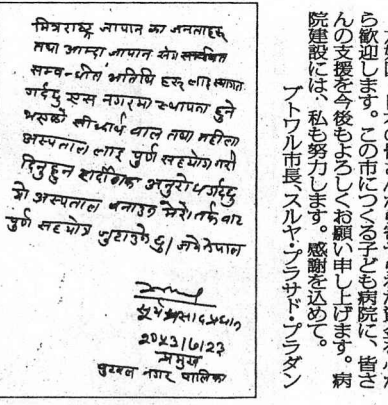
つて計画実現を図るつもりです。子ども病院へ何を期待しますか。市長 この市には国立病院が一つあり、子どものための病棟もあります。しかし、定員33人の医師は20しかおらず、常に欠員状態です。小児科の専門病院ではないため

力して読者とネパールを結んだ今回の「顔の見える援助」に、現地の日本大使館も「これまでにならぬ画期的な試み」と高く評価している。市長へのインタビューは次の通り。【藤原 健 写真も】

「病院ができれば、市民のためだけでなく、大きな病院がないネパール西部の住民のためにも役立つことができます。」

「重い病気の子どもは遠く離れた別の病院に転院させるを得ないケースがしばしばあり、多くの子どもが十分な医療を受けられないまま死んでいきます。日本の皆さんのおかげでできる新しい病院は、日本に留学した小児科専門のAMD Aネパールの医師たちが責任を持って運営してくれるところなので、高いレベルの医療が行われる

「また、車で1時間も走れば、お釈迦様が生まれたルンビニに行くことができます。カトマンズに続く第二国際空港をきっかけとさせていただきます。日本の人たちに、改めてお礼を申し上げます。」



「市民の皆さんに感謝を込めてお礼申し上げます。この市に生まれる子どもは皆、皆さんの支援を今後もしっかりお願い申し上げます。病院建設には、私も努力します。感謝を込めます。」

「十分な医療」に期待大



現地プトワル市 プラダン市長が感謝のメッセージ

「救援金にご協力をネパールの子どもたちへ目に見える援助を実施するため、今年のキャンペーンは現地に進められている子ども病院建設計画に協力しています。救援金は左記へ郵便振替か現金書留で送金いただきます。直接ご持参ください。」

建設計画の現状

子ども病院は読者の寄金を資金に、AMD Aネパール(ラメシウフル・ポカール)医師らネパール医師約25人が実質運営する。プトワル市とAMD Aネパールがこのほど協議。今週に始まる測量を第1段階とし、予定地を所有するネパール政府から3カ月以内に譲渡を受ける。現地に置いた建設推進委員会(市長、ポカール医師ら5人)が折衝することを決めた。これにより、早ければ、来春にも着工が可能になった。読者と一体となった今回の病院建設計画には、日本大使館も大きな期待を寄せている。電気と水の量は、電話はまだつながっていない。地形上、自然の排水路が利用できる。雨の処理や下水処理のシステムをつくるのにも有利。病院に利用可能な広さは約8・7畝。騒音や、空気・土壌の汚染もなく、病院と研究施設にはあまり関係ない環境と

●編集室から ネパールに子ども病院を——。今年の海外救援キャンペーンには、「阪神大震災への救援のお返しをしたい」など、本紙読者からメッセージを添え

た救援金が相次ぎました。世界の難民の深刻さを紙面で伝え、救援金を募る「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」に毎日新聞社と毎日新聞社会事業団が本格的に取り組んだのは1979年から。

毎年、アジア、アフリカなどに特派を派遣しキャンペーンを展開、ユニフなどへ11億円以上の救援金を贈っています。18年目の今年も、「貧困撲滅の国際年」。国連の最貧国に認定さ

ているネパールに連見新也、懸尾公治両記者を派遣。「明日を生きたいヒマラヤのふもとから」のキャンペーンを展開してきました。今回は、AMD A (アジア医師連絡協議会)と協力、

読者の皆さんの善意が「病院建設」という目に見える形で実っていくことに、担当の記者らは、これまでと違った喜び、充実感を味わっているようです。【新社会面編集長・中島 耕治